

■妖鬼孕ませ輪姦3 ヤエユイムサシ苗床落ち

【ムサシもイイ女だけど、やっぱお前らがいないとなあ】

【お望み通り、鬼チンポで孕ませてやんよお！】

「だ、黙りなさい！ 私たちは別に、アナタたちの、ち、チンポで……孕まされに来たわけじゃ……ないわ……！」

「そうよ……！ アタシたちは……鬼チンポに、どれだけ受精えさせられようと……！」

——負けたりしない！ 決して諦めない！

秘密特捜忍者ヤエと、御公儀くノー・ユイ。

二人が妖鬼の巣窟に立ち向かい、返り討ちに遭って鬼の仔を孕まされた後、ムサシが代わりに人質……『苗床』となることによって解放されてから数日後。

二人はその身が淫気から完全に解放されたと確信し、ムサシ救出を兼ねた反撃に出たのだが……

——んひいいいい♥♥♥ またっ♥♥♥ また孕むううっ♥♥♥ あへっ♥♥♥ あ、諦めない……私たちは、諦め……おほおおっ♥♥♥ 妊娠っ♥♥♥ 妊娠イグうっ♥♥♥ 鬼の子ども孕んでイグうううううっ♥♥♥

——イク、イク、イックウウウウ♥♥♥ ら、卵子っ♥♥♥ 卵子がまた♥♥♥ 汚されっ♥♥♥ ま、負けない♥♥♥ 負けっ♥♥♥ おあぁっ中出しっ♥♥♥ 中出しいいっ♥♥♥ 負けないけど中出しにはイクッ♥♥♥ イクイクイクイクうううう——
——っっ♥♥♥

清められたはずの身体は、鬼の巣に入った途端に再び発情。

二人はムサシを助けるどころか、まとも囚われて鬼専用の『苗床』となるのだった。

ムサシと共に犯され、揃って犯される苗床三人組。

今日も鬼の仔を産卵させられ、屈辱の出産絶頂をキメさせられる。

しかし、三人は諦めなかった。

噓せ返る鬼の精臭だけで何度も絶頂を迎えながら、それでも不屈の意志で女戦士は立ち向かう——



「……二人とも……起きてる……？」

碧の髪を白濁で穢された女忍者・ヤエが起き上がる。

周りには共に犯されたユイとムサシ。そしてヤエたちを犯した後、満足して眠った鬼たちが転がっている。

「……ええ、もちろん……っ」

「こ、これしきのこと……どうということはない……！」

青髪のくノ一・ユイ、セーラー服姿の赤髪女剣士・ムサシが、ヤエの囁きに小声で応える。二人も髪や全身の至る所を鬼の精液で塗りたくられているが、一度こっぴどく陵辱されて失神……一応程度に睡眠を経たからか、なんとか体力と精神力を取り戻していた。一方、鬼たちは陵辱に文字通り精を出し過ぎたか、疲労もあってほとんどが眠っている。つまり今なら妖鬼たちに気付かれず行動を起こすことが可能なのだ。見張りも少数。それも未熟な子鬼たちのみ。

苗床とされてから、なすが儘にされていたヤエたちであったが……ここにきてようやく隙が出来た。これを逃す手はない。鬼たちが起きぬよう静かに立ち上がると、三人は『ヤリ部屋』を抜けて出口へと向かう。

「今、見張りは子鬼が多くて五体……っ、いた！　いくわよ！」

ヤエたちの先には三体の子鬼。不意を突く形でそれぞれが一体ずつに攻撃を仕掛ける。武器は完全に奪われているため、揃って飛び上がり、長い脚から鋭い蹴りを浴びせかかる。

「はっ！」
「せやっ！」
「ふんっ！」

振り返ったところに綺麗に蹴りが決まる。よろめく子鬼たちを後にして、このまま鬼の巣から出ようとするヤエたち。だが……

【おっといけないいけない。パンチラをじっくり見てたらモロに喰らっちゃったよ】
「っ！」
(流石に頑丈ね……しかも速い！)

若いとはいえ、次世代の鬼だからかタフさは充分。更に素早さもあり、余裕の態度で追い付かれる。やはり戦闘は避けられない。しかしここで勝てれば、今度こそ鬼の巣から脱出できる。

「みんな……いくわよっ！」
「こいつらを倒して……」
「今度こそ、こことは決別させてもらう！」

「たぁあっ！」

ヤエが子鬼に対し、高速の蹴りを繰り返す。その全てを避けられるが、子鬼は反撃しない。躲するのが精いっぱいなのではなく、余裕たっぷりに遊んでいるのだ。子鬼は手を出す代わりに、蹴りを繰り返すたび露わになるヤエの下着を眼で見て愉しみ、厭らしく視姦する。

(こ、こいつ♥♥ どこを見て……………っ♥♥)

股間部に刺さる視線。それに気付いた途端、ヤエの秘部は丹念に愛撫されたように熱くなってしまふ。

「くっ……ううっ♥♥」

(どうしてっ♥♥ 見られてるだけなのに♥♥ あ、あそこが……♥♥)

【どうしたのヤエちゃん？ 視姦で半イキしちゃった？】

「そ、そんなわけないでしょうっ！ 食らいなさいっ！」

腰砕けになりかけながら、渾身の蹴撃。

しかし子鬼はあっさりと躲し接近し、同時に異様な精度でヤエの乳首と陰核を両手の指先で浅く突いた。

「なっ?! あ♥♥♥ ああああああつ♥♥♥」

攻撃にもならないはずの、柔らかい刺激。

しかし視姦で火照った身体に的確で巧みな刺激を受け、ヤエは呆気なくヒザを崩してしまう。

【ハイ終わり♪ 逃げるフリして負けシチュ愉しむなんて、マズイヤエちゃんらしいねー♪】

「あ……♥♥♥ そんな……♥♥♥ こんな、負け方……っ♥♥♥」

一方、ユイも対峙する子鬼と戦っていた。

「せやっ！」

【はい、左足ゲット～パンツ丸見え～～♪】

左回し蹴りが掴まれ、装束から下着を覗かれる。しかしそれもユイの作戦だ。

油断した一瞬の隙に、ユイの右足が地を蹴って子鬼の側頭部へと飛翔する。

「かかったわねエロガキ！ ユイ様を舐めるんじゃ……」

【え？ 昨日もたっぷり舐め回したけど？】

決まったかに思えた右上段蹴り。しかし鬼の身体能力はユイの戦術も凌駕し、右の足も掴まれてしまふ。

両足を掴まれ、逆立ちのような体勢となったユイ。

無防備に晒される股間部を厭らしく眺めると、鬼はそこに足裏を押し当てた。

「っ?! は、離しなさい、このっ、あ……」

【そらっ電気アンマ～！】

ガガガガガガガッ！！

「あっひ♥♥♥ やめなさいっ♥♥♥ くひっ♥♥♥ ひiiiiii————っ♥♥♥」

股間に足裏を押し当て、激しく震動させて刺激する通称『電気アンマ』。
幼稚な遊びでしかないが、妖鬼の苗床となった今のユイには凄まじく効果を発揮する。
陰唇と陰核を愛撫されて即座に絶頂し、くノ一としての張り詰めた気も萎びれてダラリと脱力してしまう。

【あれ、色仕掛けっぽいのでたクセにもう終わり？ 噂の房中術を喰らいたかったのに、ザンネンだな～～♪】
「くノ一のアタシが♥♥♥ こんなエログキ♥♥♥ なんかに……………っ♥♥♥」

残るムサシは、ヤエ・ユイより勝る体格を活かして必死に打撃を振るっていた。

「はっ！ おあああっ！」

打撃は当たらないものの、体躯で圧力をかけて壁際へと追い詰める。
今度こそ叩き潰さんと、右の拳を大きく振り抜き――

「なっ?! ぐあああっ♥♥♥」

その瞬間、子鬼が微笑んだかと思うと姿を消した。そして首に圧迫を感じ、苦悶の声を漏らしてしまう。
見えないほど素早く動いた子鬼がムサシの背後に回り、羽交い絞めの要領で首を絞めたのだ。
妖鬼の苗床となった今のムサシは、たとえ首絞めと言えども快感を感じてしまう。
屈辱的な状況を打破しようと足掻くが、その隙に子鬼少年は首絞めを解き、代わりに開脚するように両太股を抱えてムサシを持ち上げ――

「なっ、何をする気だ♥ やめ――」

【いくぞ、アトミックドロップ！】

ごぶうんっ！！

「っっ♥♥♥ ほおおおおおおお♥♥♥」

少年の立てたヒザに向けて、股間が振り落とされる。
体重をかけた……それも少年ではなくムサシの重さが加わったヒザ打ちを陰部に喰らい、
鈍い音と共に絶頂と絶叫を晒してしまう。

【ムサシさんも剣がなかったらこんなもんかー。この技どう？ チンポ挿れられるよりキツかったかな？】

「お……♥♥♥ おご……………っっ♥♥♥」

嘲笑う言葉も、股間への衝撃が強過ぎてムサシには届かない。
背後を取られた上に失神に近い状態まで追い込まれる、完全なる敗北であった。



こうして三人揃い、脱出を目前にして子鬼に敗北したヤエたち。

今思えば全てが鬼たちの思惑通りだったのかもしれない。

敢えて希望を与え、嘲るように絶望を与える。悪趣味な妖鬼の趣向、その掌の上で踊らされていたのだろうか。

そう思われるほどの完全敗北に、ヤエたちは精神を強かに打ちのめされながら、

打ち倒された子鬼によって個室へと運ばれる……

【いやー、前の晩に大勢とやりまくったと思ったら、手薄になった見張りの隙を突いてくるなんてね】

【がんばったつもりなんだろうけど、ボくらには一歩も二歩も及ばなかったね〜♪

あ、負けシチュ狙いだからそれでいいのかな】

【ま、せっかくだし、ご褒美にもう一回勝負してあげるね♪】

必至に脱出を図り、屈辱的敗北を喫した今もなお諦めていないヤエたちをいじらしく思った少年たち。

圧倒的に余裕があるからか、なんと彼ら脱出を懸けたバトルファック……淫闘勝負を提案してきた。

勝負はパイズリ vs 乳首責め。

ヤエたちはパイズリで、子鬼少年たちは乳首責めでそれぞれを責め、先に絶頂した方が負け。

ヤエたち三人の内、二人が勝利すれば晴れて脱出させる、というルールだ。

鬼の口約束など信じられないが、何とか裏をかくことができれば失態を挽回でき、今度こそ脱出する好機でもある。

「……いいのね？ なら、遠慮なくやらせてもらうわ」

「ユイ様の房中術で……徹底的に搾ってやるんだから……」

「これを胸で扱けばいいのだろう？ 簡単だ、こんなもの……！」

仰向けに寝そべる子鬼三体に、ヤエ、ユイ、ムサシがそれぞれ上から乗って巨根を見つめる。

ヤエとユイは忍装束を肌蹴て、ムサシはビキニのような戦闘形態となり、パイズリの準備を済ませる。

【うはっ、いい眺め♪ 準備いいね？ じゃ、よーい……どん！】

たふんっ♥ にゅふっ♥ ぶるうんっ♥♥

「んっ♥ はあっ♥ ほらっ……♥ くノーおっぱいで……さっさとイッチやいなさいっ♥」

「どう、ユイ様の爆乳はっ♥ こんなおちんぼ♥ ほおらっ♥ 包み込んだじゃうんだからっ♥」

「ふっ♥ ん♥ く……っ♥ は……早く、出せ……っ♥」

合図され、早速パイズリで奉仕……否、責めを開始。

彼らの苗床となって以降、このような胸奉仕は何度かさせられてきた。

ゆえに、どうすれば鬼が気持ち良くなるかは心得ている。

しかも今は精液風呂をはじめとする『事前準備』をほとんどされておらず、万全に近い状態。

よって存分に淫技を味わわせてやることができる。

とはいえ、相手はやはり鬼の絶倫巨根。ただ触れているだけでも気を抜けば達しそうなほど巨根自身の淫気が凄まじく、

性感帯である胸で扱けば否応なく反応し、精神はともかく声はどうしても甘い響きとなってしまふ。

もお中出しはダメええええええええええ♥♥♥」

「敗けたっ♥♥♥ おまんこ敗けたんだっ♥♥♥

お前たちの鬼ちゃんぽ様に完敗だあっ♥♥♥

だったからもう種漬けは止せっ♥♥♥ やめてくれええええええええええ♥♥♥」

体験版はここまでです。続きは製品版で！